千載和歌集巻第十一

へ 4
4717
2

ヘ4
4717
(2)

千載和歌集巻第十一

恋歌一

堀河院の御時百首の歌奉りける時初恋の心をよめる
難波江の藻に埋るゝ玉かしはあらはれてたに人を恋ひはや　源俊頼朝臣

[illegible]人と[illegible]て恋[illegible]　三条太政大臣家肥後

[illegible]の[illegible]　前参河守[illegible]

権中納言俊忠中将に侍りける時家歌合に初恋の心をよめる
[illegible]恋の[illegible]　後二条関白家筑前

女に遣はしける
[illegible]　藤原長能

題しらず
いかにせむ思ひを人にそめなから色に出しと思ふ心を　輔仁親王

[illegible]　徳大寺左大臣

[illegible]　中院右大臣

[illegible]　大納言[illegible]

昭和十六年一月十一日寄
尾野貴英氏

百首の哥たてまつりける時懐の哥とてよめる

わかれにし忘する人よゆかれし世のしれや忘らるらん　大炊御門右大臣

思へともいはての山に年をへて朽やはてなむ谷の埋木　左京大夫顕輔

高砂の尾上の松に吹風の音にのみやは聞わたるへき

あしひきの山のかひなき松や我身は[illegible]かひそ　[illegible]

思ひやれ山[illegible]の額をかこつ　[illegible]

権中納言俊忠の家に哥合し侍けるに懐の哥とてよめる

みくりはいはて[illegible]の[illegible]の[illegible]しらすなかせて　[illegible]

人よ何かはうらむへき

思ひしる[illegible]秋の[illegible]よをはなれぬる[illegible]　[illegible]

[illegible]のかれ人に[illegible]

よしふるへつまもぬ世をよつゆのきえ[illegible]

[illegible]の[illegible]人はわれや[illegible]のみとなるらん　[illegible]

夜の[illegible]日[illegible]ひとり人よつかへけり

人まちの[illegible]の神よ[illegible]ハ[illegible]みさし[illegible]とさかり　[illegible]

権中納言俊忠[illegible]　[illegible]

[illegible]つしよりそ[illegible]と[illegible]へのうはらのかやよりはらぬらん　[illegible]

懐の哥とてよめる

[illegible]さ[illegible]わせ[illegible]の[illegible]けれさらきり　[illegible]

百首の哥たてまつりける時懐の哥とてよめる

人もまた[illegible]の[illegible]下の[illegible]よさらぬ[illegible]や　[illegible]

題しらす

懐[illegible]ぬよ[illegible]と[illegible]みかわりけり　[illegible]

思ひいてそ[illegible]の[illegible]よみなれぬるは　[illegible]

みちの[illegible]ひつ[illegible]乱りそむ　[illegible]

うき[illegible]のしも[illegible]上[illegible]すなり　[illegible]

哥合し侍ける時[illegible]の心をよめる

懐[illegible]世の[illegible]とよ[illegible]　[illegible]

人も[illegible]洞の川浪[illegible]ゆふその山の花の色[illegible]　[illegible]

題しらす

[illegible]かれ摘せりけれ[illegible]人の[illegible]　[illegible]

懐の百首の哥たてまつりける時[illegible]

つまこふる鹿の音やかは夜の関守のかはとおもふらん　賀茂重保

恋の心とてよめる

滝川うき沈むの音こそまされ人の世はさだめなきものかは　藤原清輔朝臣

二条院の御時人のもとにて百首の歌よませ侍りけるによめる

神無月ははやくも時雨秋風の音にもしるし身のうきことを　源のたかまさ

横川の峰にすみ侍りける山寺にこもりて侍りける時よめる

此のよにはすみうきものと山にいりてつらきは人の世の中　仁昭法師

述懐の心を

世をそむく深き山路のすみかにもなほうき事は人の心なりけり

なかりけるさかき葉の陰にたちよりて花見てくらしつる心とそ思ふ　花園左大臣

みよしのの山の春の月をみて世にすみよしのかげやあはれなる　大炊御門右大臣

君がよのいくとせまでかすまむ月日をもおもひしりつつ　前中納言雅房

さほ山のうはばの色はかはれども心はかはらぬ松のひとりて

述懐のよみてよめる

よそにのみ見てややみなむ吹く風にわかの浦なる松のこゑかな　三条院御製

百首の歌よませ給ひける時恋の心

さもあらばあれ世のうきことは人のこころにまかせたらばや　式子内親王

百首の歌よませ給ひける時恋の心をよませ給ひける

さみだれの洞にすむ身はひとりねの袖にしぐれも思ひあかしつ　右大臣

述懐の心を

おもふこと思ひしまゝにかなはねば世をうき身とぞ思ひしりぬる　刑部卿範兼

いつまでかうき世の中にすみわびて洞の苔をしきつゝもあらん　藤原有房

恋しさをしのぶもつらし人の世はいつまでか心よわくなりけん　源師光

秋風の音にもしるくあはれなる世のうきことをさとりぬるかな　藤原惟規

かくしつゝ思ひわびてもすごすかな今はとふ人もなき身なれども　賢智法師

述懐のよみてよめる

人しれずものおもふ事のさかりをばはかなくもまた過しつるかな　加賀重保

述懐の心を

月をみてもろともにこそなぐさみし今は我身のためにのみなる　摂津守国光

あづまぢのくらきにまよふ我が身こそ世にはふれども人にしられね　大中臣定文

人しれぬ心のおくをたづぬれば洞のうちにもすまれぬるかな　源季貞

なかなかに心のかぎりそむきなばいかでか山の洞にすむらん　祐盛法師

神風ハ志のふれ奥のまつけ麻まで靡きまくへのあまれ　大中臣定雅

哀をもつ涸河毎く澄むまでは志の宮山ももる月にかゝり　祝部宿祢成中

いすゞせん志の宮山の下は河毎まくまにいでぬの跡そ　二条院御 皇后宮大夫隆

いはふしく神は河毎の古くおさへぬのあらためる跡く　加茂重延

摂政太政大臣の御時に百首の歌中に恵の心をよみ侍ける

わさ毎やわさふる神の下くろちすみさの千恵と今やえらん　後京極摂政

恵ひ跡の縁は又に毛よろり祭かるね我すみさうか　宜秋門院別当

女のあさ為ろより帰て侍けるをハつかりしもろ

おもさくハ字子く志むまし御まし記されしかば今さら成恐ろ道を　権中納言隆房

返し

おもれてもすさやまろくねまし記し今さらけれ御方ハ今さししよき人家

恵の歌とてよみ侍ける

人わとハつむしたふかいせき道て神にわ申ろ人頂しのり　大納言実家

つまうのさればそで後ちえは思ひそ空とわさ記の別しらまし　右京大夫季能

よろくへわとくれわろろ君にそをそやと思ひ神の宮トと　法眼実?

つまうのかそ三すわてみゆるさよ衣恨んそてハくへしをせし　前宗?

摂政太政大臣の御家の五十首の哥に恵の歌とてよめる

思ひきるその歎とふそすまじあいハみくさのつくさ之へハ　藤原雅経

おなじ家にて百首歌詠侍ける時神祇の心を読侍ける

とりしもそろふ御事その千秋や今より神ハおくしらん　皇太后宮大夫俊成

志のふかさひ

いすゞせん宮の千まに宿る恵の標と宗へん

わ

千載和歌集巻第十二

恋歌二

堀川院の御時百首の歌奉りける時恋の心をよみ侍りける

思ひあまり人にとはゞやみなせ川むすばぬ水に袖はぬるやと　大納言公実

題しらず

たれかしる人の心をはかなしとおもひしみにし袖しの　花園左大臣

なみだのし人わかくそつまにけるなみだしもかなりてやあらん　二条太皇太后宮大弐

白川院三条殿にかへりまいりもの侍りけるのちのよめる

かゝる涙人しれぬこそ袖よりもぞ　前斎院新宣旨

権中納言俊忠家の恋の十首の歌よみ侍りける時

いのれどもあはざる恋といへる心をよめる

うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとはいのらぬものを　源俊頼朝臣

おなじ十首の中に忍ぶ恋といへる心をよめる

これくはなれぬと袖をさけれとあふせのなかとそゆへ　藤原基俊

ふくからに宮この紅葉は
誰ひとりみしの里の若紅葉さけれども知らぬ紅葉の庵　左京大夫顕輔
　きえのこりぬる紅葉
紅葉してかひなき沢のあさ川渡よせて今ぞちるらんとや　按察使公通
　女まつころしきり
いかで我つまこふる鹿の音とくとく紅葉とおもひそめけん　徳大寺左大臣
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家歌合に
　紅葉の心をよめる
おしてかる野原の浦の紅葉さへいはかねの紅葉はめづらしき　源雅光
みせばやと年月しげる錦や紅葉の淵ならまし　前参議宰経
中院入道右大臣中将に侍りける時歌合し侍りけるに紅葉の
　声をよめる
紅葉ちる淵の川に影をとどむるひまもなきものを世にあるまじき　前参議宰相
　百首歌奉りける時紅葉の歌とてよめる
みむろ山の紅葉ちるらし風吹けばよせて浪の淵なりける　宰相親隆
　道因法師よみて侍りける

紅葉ちる山の淵にこそ世にちるものにかほそく　藤原顕季
　紅葉によめる
朝まだき紅葉をかざしてあかぬ紅葉をいくたびか見る　権大納言実国
志賀の浦や世ぞ紅葉ちる夜のかぜさむみ嵐の山のさむき夜は　按察使公実
うきさへ八重まで見し時の紅葉の山もみぢせよ　右衛門督親実
いかばかり思ひしられん山風の夜もすがら紅葉ちるらん
紅葉さへ命を惜しむ夜にちりのこる紅葉とや　後恵法師
せきもあへずみなとの川の紅葉をいかにせむ八重ならばこそ見む　皇太后宮大夫
我紅葉の年月かさねきりにも散らぬ紅葉かな　前参議教長
まれにても見むと思ひし紅葉の色に命のかはりしを見る　道因法師
紅葉の紅葉の淵のなれにし世にちるをとどめよかし　賀茂重保
　百首歌奉りける時紅葉の歌とてよめる
いつもと紅葉ちる比の淵ならで年々ゆけるみをせきかへん　皇太后宮大夫俊成
　らんと思ひしかど人々の紅葉見に行きてつかはしけるによめる
紅葉てなつかしみよるの紅葉の色の見まほしきかな　三河内侍の家集
大納言経信かつらに侍りける時紅葉の歌を人々よみけるに

八織よかさんやとうひつりてまれなるそつらかりける

逢ことも我心よりありそ浪の立はなれぬもをしき汀と　法性寺入道前太政大臣

後三条内大臣家に歌合し侍ける時恋の心をよめる

恋しさハ心わかれにけり逢てとはしらぬ人の涙をさへつゝみけりそ　道因法師

徳大寺左大臣実定八条の家にて恋の心をよめる

今ハさハ逢ことしひてまたて先命をかんとのみそ思かな　皇太后宮大夫俊成

題しらす

一すちにひとりかたの煙かゝつまえれ人のからに海しハ　平忠盛朝臣

恋侘ぬちゝのまうすとかりにも生田川よりもやすけれは　藤原通能

命をハ逢よへんとおもひとも恋死ねとこそ知らせてしかな　寂超法師

恋しともまつしともハやかてまつらさにそよこさらん　源師光

逢ことのなきを恋すてさいはかくてつれなしもあハれなき　道因法師

つれなさハ今ハなつてなかましかの逢ひの名のちきりしかせは　孔紹法師

うつ物の音に逢みてはかりハ人も数ならぬ書そまさる　源文法師

恋しき物ハかりやかなへん涙をもわすれのもしきと　明恵法師

思ふ恋の色かゝるとよめる

こゝろをはしられの浦の名をしらて八代まて人によしひあへしぬと　二条院内侍三河

思ひしる思ひつよはにさそひける花ハ桜かぬるあのすけをさかのゆり　殷富門院大輔

右大臣に侍ける時家に歌合し侍ける時恋の哥とて読侍ける

行海の雲まに人のみえつれはや逢事なきに恋しかるらん　摂政前右大臣

寄郷恋といへる心をよめる

逢事はさりともよその思ひてハ人の里はなけとのみいく　左衛門督家通

忍ひて侍ける人の物をさよ侍ける人につかはしける

かくれなきわかさし書ハ先見えて我侍れいはせそえすまや　二条院御製

百首の歌の中に恋の心を

初の色に人の心のうつりもせよはかなのとも恥すまのハ　式子内親王

契暮秋恋といへる心をよみ侍ける

秋ハおしく契ハ待るゝよかなよかゝる別のなからましかは　右近中将良経

恋の心をよみて侍ける

恋そめし心の色をしるものハ思ひの限にもえてこそ入けり　前参議教長

寄偽書恋といへる心をよめる

偽の逢ことはかけりかな書に契りの涙にそまりける　藤原宗実

題しらず

春はちりさかりて秋は梅ぢるあはれかはりのゝ声　藤原家隆

ちぎりおくもこの世をのちの世もとはまし名をはへずしてかけたまへる　殷富門院大輔

大方は月をもめでじ是ぞこの積れば人の老となるもの

あはれてもかはらじなからむ雲間よりいつる月影いとゞしのばん

恋ぬれば世の中しのびもはてぬるよ

あはれてそ恋ひ渡る涙よりふかき袖や世をいとふらん閨のうちの　藤原家基

としたけてまた恋ひしといふかひもなし

手枕の上に乱るゝ朝寝髪したにとけぬは人ぞしらしる　西住法師

題しらず

わが袖のしほのみちくるうらならば波かけまくもをしからましを　従三位頼政

しのぶれど袖の色にはいでにけりその涙こそ浦に寄る波　法印静賢

わかれにしやがてこの世はあだなれとさしもかぎらぬ別れともがな　縁忠法師

わがゆくへのうきみとよみし言の葉にかけてしのばん　藤原隆信朝臣

逢ふことのかたさはかはる人の心にやいとはれぬらん　賀茂政平

恋しさの涙の底やふち川にしづみはてぬる名をながすらん　源光行

寄石恋といへる心を

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそしらね乾くまもなし　二条院讃岐

祈恋をよめる

かりそめの契りはかくてしらせばや恋しとも身をかへてぞ思ふ　殷富門院大輔

恋すてふことぞあふせにかへさじと浮身をかくてしのびつゝ　太宰大弐重家

妹がかどゆきすぎがてにたちかへり川のせによどむ涙のしらなみ　刑部卿範兼

右大臣の家に歌合し侍ける時社頭恋といへる

心をよみ侍ける

ちはやぶる神のしるしの年をへて山のかひなきわが恋の杉　権中納言長房

恋の歌とてよめる

このごろの身はうき事をみても猶まだしらぬ恋に心かれなん　寂蓮法師

忍ぶとも袖やしほれん明けぬ間の人のまよひにたへかねてなり　俊恵法師

いまさらに忍ぶとすればそでぬれて誰をかこたむ身のとがならむ

恋ひゆく方をしらぬ人をいかにせん身のうきをのみ思ひぞわぶる　藤原家光

さらぬだに心の内はこゝろみよ涙にしづむ身をながす川　藤原季成

よの中はさもこそあらめ命をば[illegible] 静縁法師

[illegible]

[illegible] 右近衛のすけ

暁恋[illegible]

[illegible]夕風 [illegible]

[illegible] 源師光

女の[illegible]

[illegible] 権大納言実国

[illegible] 左京大夫道通

[illegible] 右衛門督[illegible]

法住寺[illegible]

[illegible] 権律師道親

松川の[illegible] 藤原盛方

うき身をばわれだにいとふいとへたゞそをだにおなじ心とおもはん 皇太后宮大夫俊成

千載和歌集巻第十三

恋歌三

題しらず

契りしも[illegible] 藤原[illegible]朝臣

[illegible] 相模

[illegible] 藤原長能

[illegible] 同

[illegible]月の七日権大納言朝光[illegible]人の

[illegible]

七夕[illegible] 小大君

ひとよの[illegible]

[illegible]

[illegible]下紐の[illegible] [illegible]太政大臣

返し

下紐は人の恋ふる[illegible]

堀川院の御時百首の歌たてまつりける時恋のこゝろをよめる
[illegible]の[illegible]池水に[illegible]の[illegible]を　大納言公実
恋[illegible]の[illegible]年[illegible]　中納言師時
[illegible]　源俊頼朝臣
中院の右大臣中将に侍りける時歌合し侍りけるによめる
[illegible]　皇太后宮大夫俊成
恨(?)の恋といへる心をよめる
[illegible]　僧都覚雅
堀川院の御時[illegible]　大納言公実
[illegible]
中納言に侍りける時歌合し侍りけるによめる
[illegible]　権中納言俊忠
法性寺入道前太政大臣の家の歌合によめる
[illegible]　藤原時昌

法性寺家[illegible]月の御[illegible]
[illegible]　皇太后宮大夫俊成
[illegible]
[illegible]　法性寺入道前関白太政大臣
[illegible]　新院御製
[illegible]
花園左大臣家によみ侍りける
[illegible]　待賢門院安芸
百首歌たてまつりける時恋の心をよめる
[illegible]　前参議教長
[illegible]　左京大夫顕輔
[illegible]　待賢門院堀川

くれぬるもまつよはなかや契(?)しを今こむとたのめしほとをまちわひてうき(?)ほとをしる　上西門院兵衛
かはらしとたのめしことのはをたのみて今まてもいけるこそ　待賢門院堀河

後朝恋の心をよめる

人はいさあかぬ夜床にとゝめつるわか心こそわれをまつらめ　従三位頼政

思ひきやわかれしほとの月よりもなほこひしさのまさるへしとは

思へたゝなにはのことのあしのねのうきふししけき心ころを　権中納言通親

摂政右大臣の時の家の歌合に旅宿逢恋といへる心をよめる

なにはえのあしのかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるへき　皇嘉門院別当

神祇伯顕仲
恋の心をよめる

恋ひしなはかなしきことをいとふともたのみてこそはつきめ　藤原顕家朝臣
夢とのみ思ひなしてもやみなましたのむることのなかりせは　法橋隆信朝臣

寄弓恋といへる心をよめる

あつさゆみひくてのほかにいりにけるこゝろの程をしらせてしかな　参議俊憲

中納言国信卿の家の歌合によみ侍りける

恋ひしなはかなしきことをわすれてやうきをばしらてやみなまし　前斎院新肥前

寄松恋といへる心をよめる

なくさめてよしやいかにも思ふとも人はしらしなわかこゝろをは　後徳大寺左大臣

恋の心をよめる

恋ひわひてかへしやせましぬれきぬの袖やかわくと神にしるしを　前中納言雅頼

題しらず

わすれてもうらみはせしよひとしれすわれやこゝろのわかれたる　右大臣

百首歌よみ侍りける時恋の歌とてよめる

浦しまのこのよにもしらすなれにけるわかれはつらきなけきなりけり　前参議教長

歌合し侍りける時よめる

恋ひまさる涙はとほくなかれきてかはくまもなきそてかな　藤原清輔朝臣
よしさらは涙にくちねからころもそてもなにせんあはぬ身なれは　俊恵法師

題しらず

思ひわひさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり　道因法師

藤原仲実朝臣備中守に侍りける時わかれをしみける所にて月をまちてよめる　遊女戸々

おもかけのわすれかたみとなりにけるなかめしよはの月をみるにも　遊女戸々

契りけむことはわすれてなけくらむとよめる

涙にや朽そめにし唐衣袖のひるまもなくかはかさらせは　中原清重
待賢門院堀河に侍ける人につかはしける時よめる
恨つゝとさてもふしぬるかすくかきりありけるをそすは　藤原家親
寄催馬楽恋といへる心をよめる
かきつめとさてありけしものは浅茅たかき人やあさくて袖の　藤原伊経
隠恋といへる心をよめる
わきて猶深きのしは宇託家藤しとや人のあやめん　俊人会家
月前恋といへる心を
涙ともしらぬの袖にわかれく月の中よりぬるゝ
寄他人恋といへる心をよみ侍ける
思ひは無余の袖しやあの雨しらは人さもあるの讃六内大臣
忍ふれとも人にそれかくさるのは袖さく人に涙しやは　左近中将公衡
世よこのひくわさてぬるを世の中の行きれはにら
恋しけり
涙より咲く浮風のあの袖にまよのより朽そめて　右兵衛督隆房
恋しらす

思ひは無余にもやとくさは人袖はかさかりよし　従三位頼政
くりぬしとやしき猶や恵ふしものより秋待のとさまく　源師光
ゆふ待分をうへそやなさ人つまとそかれく恵みわん　藤原隆親
あはきかくにて袖を行くなみつむ人のさめらは　源光行
忍ふれは袖も待てぬやうやくりあふもみえくさ　皇太后宮大進よみ人
今こそよのつ袖くらうりもれわすれそ今つしこころ　皇嘉門院尾張
契りし待ちつくと見てつ世に行かりしせり
知ふくやしのふにはあて恋の契りは夢のかたみなりけるさ　右近中将忠良
夢中逢恋といへる心をよめる
見る夢の覚めぬやうてのなかくらふて袖の常とまうさや　大宮大夫少将
人に行かりしせり
恋しのやあの浮世の恋に別の庭に消て恋かへれ　二条院讃岐
恨逢ひす
涙の初の言の雨と恋八世に去くよの此家の涙に後人ならん
年大臣によみける時百首よせ侍ける時よめる
よみ侍ける

かへりつるなこりの空をなかむれはなくさめかたき有明の月 摂政右大臣

わするなよ世々の契りをすかはらやふしみの里の有明の空 皇太后宮大夫俊成

千載和歌集巻第十四

恋歌四

題しらす

いかにくるれは思ひしとかそへしかともいくあきのかはることなき心なりけり 和泉式部

見もみなさそふにもしるれ思ひしれと物の涙まてしくれ

むかしゆらんしもの身をしれはたゝ涙のみかゝるうきよにもなかれ
てつゆもなし

よそにても八束にてもなほしたはれてその思ひはえそかわかぬ 崇徳院御製

ひさしくも海にてこそりものゝあはれもまたありけるかなしみ
つゆもなし

あひ知りて侍りける人のもとにはしめてつかはしける 小式部

大宰帥敦道のみこのもとに侍りけるに秋のころ思ひかけす
てわすれにけれはよめる

待とてもかはかりこそはあらましか思ひもかけぬ秋の夕くれ 和泉式部

題しらす

かくしつゝ八十ぢにあまるよはひにてなほあはれにぞ秋の山か
とてものりより稲ふく嵐につゆもたまらず　前右大臣

落葉花
月のさえてあかく家にのこりし秋をこそみておきけれ　前太政大臣

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時よめる
末の露もとのしづくやいかならんかさねてみえし秋の夜の月　前中納言基俊

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の歌合によめる
まつ人もきてみぬ宿の秋の夕べは露こそ袖にかゝる物なれ　藤原仲実朝臣

家の花をとよみてたまへる

嵐吹く浪の梢の花よりもこゝろにかゝる秋の夕ぐれ　源雅光
名所によりてよみ侍りける
名もしるき八十島かけてこぎ出る舟のうちにぞ秋はきにける　大納言師通
権中納言俊忠卿家にて恋の歌よみ侍りけるによめる
寄恋
恋しさを夜のまくらにかこつかなうらみし事もわすれはてゝ　侍従三位成家卿
四十
いかにせん宮ぬちの百首の恋の歌とてよみける
とよみ侍りける

あはれにも見えし人の心かなおもひさだめぬ世のならひにて　権中納言師時
わがなげく心のうちを人しらで涙のみこそ袖にかゝりけれ　藤原通経
ゆふぐれはそのゆかりともなけれども思ひぞいづる恋しき人を
崇徳院に百首の歌たてまつりける時よめる
利根川の水の流れはかはるともわが思ひこそしらせまくほし　久我内大臣
綾瀬の渕やふかきの海よりもふかき心をいかでみせまし　八条前太政大臣
東やのあまのたく火のゆふけぶりたちそふ恋のしるしなるらん　上西門院兵衛
恋しともいはではいかで知らせましたえず心にかゝる思ひを　前参議親隆
恋しさのこゝろのうちのしのぶ草うらみて人のかれやはてなん　待賢門院堀河
かれやすき人のこゝろの秋風にわが身ひとつの露ぞこぼるゝ　藤原清輔朝臣
百首の歌よみ侍りける時恋の歌とてよめる
命にもまさりてをしくあるものをみえぬ人こそ恋しかりけれ　登蓮法師
女のもとにつかはしける
なましやさのこそみのみの中にある身をわすれぬる恋のかなしさ　平実重
題しらず
人のうへと思ひしかども今はわが身のうへにぞ恋はなりける

契りけることのはよりぞそねみけるつらきもしらぬ

ちぎりしは[illegible]はなりけり　[illegible]

思ひかね[illegible]女の常に[illegible]

つかはしける

天の川[illegible]渡りの[illegible]　従三位[illegible]

[illegible]老[illegible]

よみ人しらず

思ふ事[illegible]年の[illegible]　院御製

題しらず

[illegible]今[illegible]　[illegible]通朝臣

[illegible]　従三位頼政

[illegible]

[illegible]二条院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月[illegible]　刑部卿範兼

題しらず

[illegible]藤原為実

[illegible]円位法師

[illegible]空仁法師

[illegible]源仲綱

[illegible]

[illegible]二条院内侍参河

[illegible]

一夜とてよかれし床のさむしろにやかても塵のつもりぬるかな　俊成

百首歌奉りける時遇不逢恋の心をよみ侍りける

おろかなる心とみゆる年の今宵のこゑ(?)きこゆらん　摂政前右大臣

寄不言恋といへる心を読侍ける

逢までのほどハ(?)かなしきハ何をかたらん(?)しのぶる(?)のこと　前中納言雅頼

後朝恋といへる心を読侍りける

うつり香に何思ふらんさよ衣よなよなかへす袖のなごりの(?)

わけて袖のしづくにぬれぬらんかへるさのみちのをくるゝ月(?)　権中納言定房

よみ人しらず(?)なりにけり

かたみなやおもへばかなしきのふけふ(?)のそら(?)　右近中将忠良

恋の心をよめる(?)

ありしよの契りなくに袖ぬれて人まつほどのなげきなりけり　後恵法師

みせばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず　殷富門院大輔

海川恋といへる心を読る

山城の(?)ゐでのしがらみ(?)せきかへしいかにせん涙の川のおもかげ(?)　従三位頼政

寄忍恋といへる心を読侍りける

恋しきは袖のしがらみ(?)のせをはやみうきなをながすものにぞありける　藤原隆信朝臣

寄(?)衣恋

いくめぐり(?)ハ逢見ぬ中のかはらざるらん　藤原雅経(?)

摂政右大臣の時百首の歌よませ侍ける時遇不逢恋といへる心をよめる

待わびしその夜の中はたえぬとも(?)なに(?)かはりけり　源仲綱

初逢恋(?)といへる心をよみ侍る

今ぞしる思ひ出よとちぎりしはわすれむとてのなさけなりけり　二條院讃岐

恋の歌とてよめる

恋ゆへに心のほかにわかれにし人をそれとはいかでみるらん　太宰大弐重家

いせ嶋やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖はぬるゝものかは　道因法師

遇不逢恋といへる心をよめる

ちぎりしを(?)わすれじとのみ(?)頼めども(?)しらぬ(?)よはのくるしさ(?)　俊恵法師

寄衣恋といへる心を読る

唐衣へだつる(?)ほどのうら(?)なれや人の袖をもぬらしつるかな(?)

恋の歌とて読侍りける

身のうさを思ひしらでややみなまし逢をかぎりのつらさなりせば　法印静賢

摂政右大臣の時家の歌合に恋の心をよめる

逢ことハ身をかへてとも待べきを世々を隔てむほどぞかなしき　皇太后宮大夫俊成

ちかき頃の事にや(?)さし忘られかねてゆく(?)業平朝臣(?)

題しらず

思ひわびおなじ宵の夢にまつ(?)人のみえば(?)……

思ひやる(?)……

枕のちかく(?)……

涙にいるれば見る(?)……

返し

我が涙かゝるぬ夜半の……

題しらず

見しよ(?)……右近中将忠良

忘れ(?)……権中納言通親(?)

千載和歌集巻第十五

恋歌五

題しらず

かくて我は……相模

我をと(?)……和泉式部(?)

いかにかくも……

みなの月に……

思ひしは浮世の常と……崇徳院(?)

左大臣……

返し……

まよひ(?)……馬内侍

……大弐三位(?)

[illegible]　相模

女のもとに山さとよりいひつかはしける

山[illegible]　大納言忠信

[illegible]女の[illegible]

久しく[illegible]

[illegible]へまかりて[illegible]

むかしみし[illegible]　藤原清輔朝臣

[illegible]

[illegible]　左京大夫顕輔

中納言国信家の哥合に恋の心をよめる

人心[illegible]　藤原基俊

堀川院の御時百首哥たてまつりける時恨の心をよめる

[illegible]　隆源法師

花園左大臣の家に侍りける女に中納言[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　中院右大臣

[illegible]

百首の哥たてまつりける時恋の哥とてよめる

[illegible]　待賢門院堀川

[illegible]　上西門院兵衛

[illegible]　参議親隆

題しらず

[illegible]　左大臣

[illegible]　右近中将忠良

[illegible]　皇嘉門院別当

[illegible]　太皇太后宮小侍従

[illegible]　二条院讃岐

かはりゆくけしきを見てもいける身の命をあたにおもひけるかな　殷富門院大輔

[illegible]　俊恵法師

[illegible]　円位法師

月前恋といへる心をよめる

なけゝとて月やハ物をおもはするかこちかほなる我涙かな

[illegible] 寂蓮法師

恋の歌とてよめる

つれもなき人を[illegible] 祐盛法師

[illegible] 藤原隆親

思ひあまり[illegible] 源有房

[illegible] 惟宗広言

いかにせむ[illegible] 源仲頼

海路恋といへる心をよめる

思ひあまりうちぬる宵のまほろしも浪路をわけてゆきかよひけり 鴨長明

[illegible]

[illegible]

年[illegible] 左衛門督 中納言

百首歌[illegible]恋の歌とてよみ侍りける

[illegible] 皇太后宮大夫俊成

年[illegible] 左京大夫修範

[illegible] 藤原季通

[illegible] 皇太后宮大夫俊成

[illegible] 藤原清輔朝臣

[illegible] 上西門院兵衛

恋の歌とてよめる

[illegible] 殷富門院大輔

題しらず

[illegible] 摂政前右大臣

[illegible] 右近大将実房

関路恋といへる心を詠める

[illegible] 前中納言雅兼

[illegible]

世にしらぬ秋の別[illegible] 権中納言通親

恋の歌とてよめる

[illegible] 藤原隆信朝臣

あつ計ちきりし中しかはりにし世に人をとはおもひきやかる　藤原宗家

秋夜恋といへる心をよめる

頼れ寝とめ聞かすれはひとり寝覚の枕にそしる　俊恵法師

十首の歌人々によませ侍けるによめる

よしさらは心ならてもまつ恋しき人こそあまた　前参議教長

暮恋の心を人々よみけるに

すれぬとやゆふくれの恨しとそ思ひわかれし　仁和寺法親王覚性

題しらす

見をみよむ月のよはさくらしかの秋のあさ衣　源俊頼朝臣

さかはは萩の花さへ色かはるへき秋にあはそ袖もぬるらめ

うれしさは夜ならむもみちはりは錦よりもやはらかに　馬内侍

恨むへきうちにもおのかとかにしてこそ君をこそ　和泉式部

千載和歌集巻第十六

雑歌上

上東門院より六十賀とこすひのひの時清給ける歌　法成寺入道前摂政太政大臣

むかしより今日の日かりせは奥山の花の青葉や年をとゆかし

上東門院入内の時屏風に松の木ある家に鶴なきわたれる所をよめる

鶴のこのみあをの宿をえし　大納言公任

一条院のほかの時の御屏風に風吹く所よめる　大納言公信

人のもとにさしいたしてあそひける所よりよめる日つさ十二

いかてかはれのとをかりそとわれてもうしまちいてたりける　清原元輔

後拾遺

宮方朝臣さりて侍りける

おひさの山井のなかはにもえわたるをいはれるひのとまりけるかな

とそのてあすれなかりける

こそ水の音にもまた聞ゆかりそ　宇治前太政大臣清少納言

十二月に出て門をさしてうちあけなりて男をかへり

門はわきおりんやとこそ思ひけれはかなかりける

女の宮のきれたりけるに[illegible]宮ところ[illegible]りん　上東門院

藤原[illegible]朝臣[illegible]の[illegible]ありけるにつかはしける

まて朝にくつりしける

[illegible]ておもひわかれの[illegible]うちをかくのをもひつゝまさる　藤原[illegible]

二月[illegible]けれおうちにて[illegible]院[illegible]のかれしてあるは[illegible]

みよし[illegible]内侍国[illegible]よりふしく[illegible]に[illegible]

[illegible]大納言[illegible]をかくしてひとのをまんこの[illegible]

よりさし入く給はせしはかなく給けり

[illegible]の[illegible]ありかる[illegible]よりをむかしをもひおもひ[illegible]　周防内侍

これはむかし給はせしは返すにより

わきて[illegible]の[illegible]にも[illegible]をいろくにあかしきのに[illegible]きをなへき　大納言[illegible]

一条院[illegible]宮[illegible]にの[illegible]きらめて給りもの[illegible]三月廿八日二首

後より出給ひてにの[illegible]よりつかはしける給ける

[illegible]くる[illegible]をかる[illegible]しけるかなさのかなさへ[illegible]のなかくに　[illegible]

[illegible]

[illegible]のかしのあかりの[illegible]をつかはしける　源大納言

[illegible]くさくるかれける人のむかしの女房にはゆきり

おりて思ひかくしてかへてしもかなくまとわかつきとくむ

にもかれはつかしける

[illegible]ともをのぞかはしさむにもさめつゝかに　選子内親王

選子内親王の給ける大斎院の御かりて[illegible]の[illegible]

車にのりてみる日給ふりける

みな人のしかりの[illegible]のかやしかやかれかつかさへや　[illegible]中将

まつりのかみ[illegible]のかくのやしかりしける[illegible]院の女房につかはしける

あるやふるひのかきのこたかのかうつ[illegible]しかり　藤原[illegible]朝臣

[illegible]みる[illegible]師[illegible]の[illegible]

をつかはしけるにそむくはしかつかしける

[illegible]は[illegible]かなりは[illegible]きのひとかるやかさる　和泉式部

上西門院かくれてつかはしける[illegible]の[illegible]

[illegible]のはかなし女房のかにつかはしける

きのふまて見しかしとみなれたの浦[illegible]をかくるらん　八条前太政大臣

かりのハさかへり給ふそなつかしきのさく人給けるみの白髪寺の
みるのりよりけり月ハ待ちつきく給ける夜すつけられ給りける
みやこや新院より給ひてさきまての波路よ神そねかひし 式子内親王
右近衛権ニ給ける時中院右大臣中納言ニ給けれハゆるされ
かさそ待ける波つくさ将よそこそのへ給ける時のさらをさしそへ
どそきくく給ふりて給ける
かくもまそてさくのしらし撰ふ海の波なみた飽れぬる かな　大宮 前太政大臣
返し
すむかはれもえ心かくさ撰ふ又いさくれ時ともありぬるかん　中院右大臣
西行法師に月見侍りける夜の上卿に立給けるかりにハ藤原範兼
法性寺まてより給けるに、まらせ給ひて、雨なとさせ給けるをなかし
くみもかしみの月かりつるかくてうかさそ給けるか
いかのみし世ハからとけり待ち心のかとさくりけつき　後徳大寺左大臣
上西門院より侍りしことさふれ出てありける法女房の中に月そうつ
つかそこに筆つさくよ涙さそれにそ給ハれハつかはし
参詣せよとのたりける時のとけれ事さとめかりけるかたや人の外ん 式部
二条院の御時より法ねえちに月りとうけい雲かくれ給のおのか
たへよ給りけるにあまる夜ハゆくさまさりまされハ給まありそに御月の
あかりきるに女房たちよ給ける
今夜の大内山の山よりハ春くれてのこ月をとこそかれ　従三位頼政
三条女御 頼子 西世のさかわさかさに月なそつつ給かとそゆくる
秋をへく光とませくこのよ思ひいて月れのけふとおわされ　皇嘉門院
月の歌とてよみ侍ける
ゆふ今よ思ひかそへて見ハこの月のさのかくてるらちのそてにされ　仁和寺法親王覚
月の方のわまるよまを侍りの時よ給ける
さく涙や国はみつくさそへ志しはなかれよ月ひかりむし　法性寺入道前太政大臣
あまの原ゆく月ハひかりもくもらぬのかはのそなるか
題しらす
ひかりのそ月ともむつる秋の夜のよもゆくかりのはさむし　中務卿具平親王
よのかさえなかりやさらの縁ゆるん新まさあまれの月をこそうれ　赤染右衛門
おもかけもし月ハおもそのとめかゆや神の宿まるおもくさ　相模
ひかりのとあやまたれつつねられぬ今宵この月をとこそせんや　和泉式部

おりふしにつけて侍りける月をいかにとよみ侍りける

わかゝりし昔の秋にかはらねどおもひのほかにすめる夜半の月かな 久我内大臣

山家月といへる心を讀侍りける

住わびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月かな 皇太后宮大夫俊成

百首の歌たてまつりける時月の歌とてよめる

そらはなほくもまの月をよそにみてまたたれにかは宿るなりけり 前参議教長

月前述懐讀侍りける時

さよふけて吹井の浦によるなみにさえてもすめる月のかげかな 藤原家基

住わびてうき世にかへらぬ我身かなありあけの月のかげをたのみて 俊恵法師

天の原あまのいはとをいでゝより光ことなる月はありけり 賀茂成保

さひしさにあはれをしれる人もがなひとりぞ月をながめくらせる 藤原隆信朝臣

今よりはあはれなりける月をみてこゝろのすみにかゝるなりけり 藤原清輔朝臣

寄月述懐の心をよみ侍りける時すべて世のうきことをおもひつゞけてよめる

法のためみにしむ月はいかにしてうきよのほかにすみわたるらん 登蓮法師

おもふことありて侍りける時月をみてよみ侍りける

おほかたのうき世にめぐる月はなほありしむかしのやまのはの月 源頼政

月のあかゝりける夜よみ侍りける

かくばかりうき身ながらもめぐりきておなじ月をもみるよしもがな 源仲正

見月思旅といへる心を

さすらふるわがみにしあればきさがたやあまのとまやにあまたゝびねぬ 源仲綱

百首の歌たてまつりける時月の歌とてよめる

ながむればわがよの中のうきことも月にはさそふこゝろなりけり 待賢門院堀川

法住寺にて月の歌よみ侍りける

のどかなる雲ゐにすめる月かげをひさしく見るべきみにしもあらねば 源頼政

しばしこそなげきもすらめあきのよのかさなるまゝにすめる夜半の月 藤原宗家

みのうさを月やあらぬとながむればむかしながらの影ぞもりくる 仁和寺後入道法親王

このもとの月のさやけき夜はのそらやまのはちかくくもぞかゝれる 仁和寺法親王守覚

月の歌とてよみ侍りける

とめきぬとおもひしかども月かげのあかぬこゝろはやすらひにけり 覚性法親王

わかれにしそのよのまゝにあはれなる夜はの月かげなにをかはみん 持明院中納言通方

殷富門院大輔すゝめ侍りける百首の歌の中に月の歌とてよめる

いかにせんさらでうき世はなぐさまずたのみし月もなみだおちけり 藤原定家

題しらず

山ふかみ松のあらしを身にしめてたれかねざめに月をみるらん　藤原家隆

ゆかしくもいくよすまでかねてきく山のはにのみいりぬる月　公実院家

世をいとふ月とおもへや山のはにいりぬる月のかげもなきかな　法印寛快

さりともとたのむ心のなぐさめにおぼつかなくもあすをまつかな　藤原隆親

暁秋月といへる心をよみ侍りける

あさぢふの庭のまさごにさえわたる月はひかりのふかきなりけり　道因法師

世をいとふ人のかくるゝ山にしもかりにすむべき月をみるかな

秋の頃月をよめる

つねよりもわかれをしむ身のうさをかへすがへすも山にこそ入れ　平実重

秋の夜のながさにあかぬ月のかげ名残をしまず入るなりけり　俊恵法師

九月十三夜月を

さしくもる秋をかさねて世をすつる身にもかはらぬ月のかげかな　藤原家政

賀茂社の歌合に月の心をよめる

かつらぎや神のちぎりもなき月はくもらぬ夜はのかげをこそまて　藤原親盛

山家暁霧といへる心を

ますらをが宿のつまにはまた見ずと月をみるかな　大江公景

山家の月をよめる

見し人の山をかくしてたのめつゝあかぬ心の月をこそまて　登蓮法師

月照山家といへる心を

行きかへる秋とやおもふ山里の杉の葉わけに照る月のかげ　紀康宗

月照草庵といへる心を

住みなれし山のいほりの月かげはさえてこそすめ　法眼長真

山寺月といへる心をよめる

ふりはてし我がすむ宿にまつかけのありあけの山のはの月　藤原家基

苔庭月といへる心を

山風にまがふ木の葉を払ふ夜のおもひのまゝの月かげ　覚延法師

題しらず

山ふかく住みなれし身のあはれにも松のはかげの月をみるらん　法印静賢

月影の入るを惜しむはまことにもありあけの月を見つゝこそ

藤原兼実の家にて百首の歌よみ侍りける時、月の歌とてよめる　法師

いせをとこ六十年へてなほ秋の月ぞ山のはにかゝりける　俊恵法師

月の歌とてよめる
うき世には山の中にはあらむとやさそふ月のひかりを　圓位法師
二条院の御時殿上おりて後月を見て侍りける
いにしへの雲井の月を年へてもなれしよのみそこひしかりける　左京大夫顕輔
堀河院の御時百首の歌たてまつりける時述懐の心をよめる
唐衣袖にもしくをかへしてもあらなくにあはれの身をもなけきさそかな　藤原基俊
法性寺入道前太政大臣の家にて法師のよめる
これはけふ法性寺入道前太政大臣家に侍りけるを人の申ける
けふまてもみてしの年ものまへにあはれはかつかしきかな
ちとせまてつもりの雲を今をかくさむる秋もなかめり
述懐とてよめる百首の歌の中によめる
世のなかのうきにもあかぬ山かけしかは思へはそなたかりなれ　源俊頼朝臣
述懐の心をよめる
思ひしるむかしのことはよはすきのみなしはてぬるきみ　寂蓮法師
かくしつゝやらぬなからへしもありなからもの世にとゝめかたき身の　道因法師
てる月のまへにもいつかかけてなるはなかなかにむかしものをなかむ

けふそよるへきなりけり
いまはとてかへるのしはのなきにしもかれぬるけふをかきりなりけり　源俊頼朝臣
古郷の桜の花をちりかたになりて
ゆくとしのかへりこぬまの世の中にあらはまたみむ花のなこりを　道因法師
あはれしらぬものを
みやこにはまたきさへの花のなかにちりなむのちは人のかもなし　道因法師
津守国基身まかりて後住吉の神主にて侍りける
つかへこし代々のかさなるすみよしのかみのめくみをしるなかはなる
松のことをしけりてのちさかへけり
人心かはれる代のすみよしの松のことしはかはらさりけり　国基か子　津守景基
吉野の歌をよめる
白雲はよしやと思ひしよしの山花のちりぬるときはさくらの　中納言伊忠
さくらの花さかりになりてこれをかへしつかはしけるに
おなし人にてやかてつかはしたる　前大納言宗通
屏風に滝落ちたる所をよめる
あはれなるなかにもなほしみこの山よりおつる滝のしらいと　藤原長能

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかりける時よみ侍りける

水の色のたゝ白雲と見ゆるかな誰さらしけむ布引の瀧　六条右大臣

竜門寺にまうてゝ仙室に書つけ侍りける

葦たつにのりてかよへる宿なれは跡たに人はみえぬなりけり　能因法師

おなし龍門の心を讀侍

仙人のむかしの跡を来てみれはむなしき床をはらふ谷風　藤原清輔朝臣

布引の瀧をよめる

音にのみきゝしはことの数ならて名よりもたかき布引の瀧　藤原良清

ひろた中しまをよめる

漕きてこし宮の中島繰かへし見れともつきせぬなかめなりけん　藤原敦方

堀川院の御時百首の哥奉りける時恋の哥とて讀侍ける

ろうさやはつまとそねよのゆへよこふ丸岩ねにけむせきなりけり　大納言師頼

おなし御時うへのおのこ共題をさくりて奉つりけるに

絵島をとりてよみ侍りける

いりかたに成にけるこそしられけれ此世の海月清くすむ夜は絵島か磯　権中納言俊忠

西宮の前の中の松をよめる

玉藻かるいくらさとの岸の松幾世まてかは年のへぬらん　修理大夫顕季

夜舟をよめる

漕出ては八幡浦さしのさゆりかは浪と風の吹ぬ日そなき　源俊頼朝臣

広田社の歌合とて人々讀侍りける時海上眺望といふ心を

よみ侍りける

なかめれは八島の山のかくれ行くその沖に出る舟　権大納言実家

ちり浦に浪と見ゆれは雲をは浪八雲井のかゝれるかな　前右近中将実宗

あはれよきあまへの沖とはわたせ八重手にまかふあまの釣り船　左近衛中将実定

眺望の歌とよめる

あかしかたに漕出て見渡せは霞よりこそ沖のつり船　円玄法師

夜露に絵島かいそとあかしかたまたくもりなき浪のうへかな　藤原忠度

和歌の浦を讀侍ける

行かへる浪にまかひてや隔つらんあしへをさしてわかのうらなみ　祝部宿禰成仲

千載和歌集巻第十七

雑歌中

五十御賀ありて又の年の春鳥羽殿の桜さかり
なりけるを御覧して花をよませ給ひける

色あかハ君のとさへに桜花錦の春とハ咲くへき　鳥羽院御製

ところさへ作て果し桜花憂世ハ花しかしの外し　仁和寺入道法親王覚性

僧都覚法寺にてはへの年忌後白河院の御前にて花をみ
宿し花ちらしよ見へとも如何ハ人のしかりける　仁和寺法親王

かくらかへりくなる山の花見ありとさかしけれは因綱の

花のいり後かりさうるとよんて

いかへよかならさりけり山さくら花ハ秋とハいてしてそありけん　前中納言基長

道世のほとるのいまそてよめる

春のとまれさこそ人にたえまて花ハ秋ならましと　白河大納言公俊成

花山まちかくまちて待ちけれとこそのきハ実の所にそ

りしに華をあつめてはらひたりけるを見侍りてよみ侍る
あはれとはわか思ふ九重の雲ゐの花のいろもおなしさ　東三条院
山さとのかりくらしめしとまちける何侍る
今はとてたのむかけなくなりゆく山かけとふくことなし　前大納言公任
春の花わかるゝ風のかりそめに
うき世をはそむかはやおもひすまゝ山里は住よかりけり
猶のうへけるよめる
花さそふあらしの風のにくきかなちるをまつとや思ふらん　和泉式部
前大納言にはかに思ひよらぬ所につかはしける　法性寺入道前関白太政大臣
暮春
花の戸をさしてや春の行宿をとめておもはゝ思ひけん
山寺にまかりて侍りける時花をみてよめる
さそひゆく風をもしらてちりにける
かくてこそとはるゝ山の花をみてこゝろは道命法師
除月の法ことにつきて詠侍りける時花のうつろふを
身こそはなのちりなん後のなかめ春そのけはひ　資
寄雲述懐の心をよみける
思ひしるてや春とをしむ世の中はかはらぬ世は源仲正
世をとのねくらは山川の花とうかく
あさとみ夢やさらでも花にのみ心はそめしかん　圓位法師
花の哥あまたよみ侍りける時
花にそむ心のいかてのこりけむ捨はてゝきと思ふ我身に
佛山の桜の花をとふらひて思ひよるをとをしふるなり
世をそむきて後花をみてよめる
この春そ心のとかに花はみむかゝらぬ先にとも思ひしと　寂然法師
花見てよめる
世間と思ひしものを花はいまはの花の数にはあらし
家ところみやこの花をみて山の花さかりに女の
てふかく花のにほひをうつしてよめる
わかれにし世のあるにはこゝろゆくとも思はれんよそにこそ
花のちりけるに寺にまうてゝ今宵のまへの花をみてこそ
よみ侍りける
かはらんとおもひしと思ひて桜花ちりぬるをこそおしむみよ　中宮大夫家の太政大臣

依花待客といふ心をよみ侍る

山さくら花をあるじとおもふらし人をとふ人の宿のかさなん　従三位為継

西行法師すゝめ侍ける百首歌の中に花の歌とて読る

いつかわれ世をも世としも吉野山花のおくにも籠りすまなん　藤原定家

花の歌とてよめる

惜しからぬ身をおもひしる世にも花見る身とやなりにけるかな　源季広

家に撰歌合し侍ける

むかし世にあらはれて花と添ける　法師敷朝臣

亀山院嘉元の比詠百首歌めしける次でに花の歌とて読る

後の山花をと待られ人も花にうつしけり　権中納言

後宇多院の御時十首歌よませ給ける時述懐の歌とてよめる

吉野山桜をかざしとりかへの花の物をひかけり　右兵衛督

嵯峨の後出家し侍ける

思ひきや身をのこしたる世をすて世をもなすべき　前大納言為氏

述懐の歌とてよめる

桜花ちりて年ふる身の又世にもまた思ひいでけり　従恵法師

いにしへのためしにひかむ身をもわすれめや　道因法師

述懐の心をよみ侍ける時むかしの山院に侍しをおもひいでて

いにしへをかたるも花にうつろひき八重の川の水の泡　前参議為家

庚申の夜の歌合に

あかつきのそらをながめてもいかにせんうきよにのこるかげかな　藤原為子

故大納言宗房中納言にて侍ける時十首歌よみ侍けるに述懐歌とてよめる

桜さく山路の雲のうすき夕はちるもさらなる花の吹く風にも　法印定円

宗尊親王文月の夜よませ侍るを聞こへて侍ける時

なにはえにおちくる月のかげもやうかげかすかなり　太政大臣

題しらずして

世の中をいとふとならばいかでかおもひすつべきうきをしのばん　前大納言雅孝

それとしもなくてすぎゆく世の中を身のうさもおもはでいきてぞ有ける　菅原是忠

かくてのみ身をおもふとてもいかがせん　一条院讃岐

摂政太政大臣家の歌合に述懐の歌とてよめる

なにとなくいけるなかにもまたぬかなこの世のことはゆめとのみ　源師光

法さめしにいそぎにまうりけるを辞しける時大僧正行尊
がもとにつかはしける
いにしへの庭の萩原たづぬとも跡の蓬に埋もれにけり　源俊重
このころ山里に住み侍りける法師のもとにつかはしける
柴の戸をさしてや人のとはざらん山路の末に住まひせしより　源俊頼朝臣
山田の庵りをみてよめる
小山田の庵に焼くなる柴の煙こそやがて雲となるらん　橘盛長
陽明門院の御時百首の歌たてまつりける時山家の心を
山里の垣根の竹のよのほどもいつかはなれてすみうかるべき　二条太皇太后宮式部
題しらず
柴の戸につけし庵も今はとて見しかげもなき月のすみかに　藤原基俊
世のうさはわかるべき月の影なれや心にすみてかなしかりけり
かくて後はいかにと思ひけるに
この世にはすみへき宿もなきものを手にかけし心　藤原清輔朝臣
題しらず

命にはいかにうき世をなげきつつ松の下にて　和泉式部
数ならで身をうらむる心のみすむにかひなき身をいかにせむ　左京大夫顕輔
浮かりし世間の中をば住わびて　藤原実房朝臣
あはれにも我が身ひとつのうき世かな
前大納言公任の家にて侍りける時
人の心をいかがたのまん　前中納言定頼
君にもし
荻風の身にしむ秋の夕暮をとふ人もなき宿のさびしさ　前大納言宗行
前大納言公任入道して侍りけるころ法性寺の堂にまうで
法眼のもとにて侍りける
いにしへの世にふることもなき身には心の秋をいかにせん　法性寺入道前太政大臣
思ひやれ
おもふことなき身ならずは法の庭にまかせてあらまし　入道大納言公能
おもふことなき身にしあらねば
二条院くらゐさらせ給ひてのち院のまへにて

桜ハちりにけるをつゐにまちかねてこゝろにかゝりて侍りける
うちよりてこそはちらめとて侍従がつかはしける返りごとに
ひとりすむ春は桜の花ゆへに門をさしてもこもりけるかな
一品聡子内親王仁和寺に住侍りけるに花のさかりにまいりて
ところのさまにおもひやられてよみ侍りける
山里のさびしきやどのけしきにはうき世をいとふ心こそすれ
あし
太宰大弐重家のもとにて三十六人集をかりてかへしつかはすとて
よみ侍りける
あのまゝにかきながせともみえぬかなきえにしあとのかたみなりけり
あし
むかしおもふこゝろのうちをしるやとて
みなわたり侍りける
よのなかをいとひてすつるひとこそはうき世にのこるかたみなりけれ
述懐の心をよみ侍りける
思ひきやこの世のことをはかなしとみつゝもいまだ世にすまむとは
大宰大弐によりて侍りける時菩提のこゝろをよみ侍りける
ひとりすむ身やのちの世の菩提にもかゝるえにしとなりにけるかな
述懐の心をよみ侍りける
身のほどをしらで人をもうらみけむ年をへぬればおもひしらるゝ
うきことをなげくや世をばそむかましいかにせよとてこゝろなるらむ
後の世のみちはとほくもあらぬかな心ひとつのうちにこそあれ
百首歌の中に述懐の心をよめる
なにゆへにかゝる世にしもうまれきて人をうらみてなげくなるらむ
たのまじなおもへばかなし世のなかのはてはあらしのふくにまかせて
題しらず
のちの世をおもふこゝろのあさければ心の月のかげぞくもれる
十月に喪服になりて侍りける又の年のはての月をみて
侍りけるときよめる
旅人の衣手さむくなりにけりかはる袂にしぐれふるなり
題しらず

うき世にはかゝれとこそ世にはうまれけめことわりしらぬ涙なりけり　藤原家方

よをそむきて後関よりまかりける時みちのほとりにてよめる

のがれてもよるべなかりける身のうさを思ひしりてぞ袖はぬれける

此ころはこゝろにまかせてすみけるを　前右京権大夫頼政

世をいとひはてぬる身にはいつまでかうきをばしらでこゝろすみける

かくばかり世をも我身もすてながら(世イ)猶こひしきはむかしなりけり　空仁法師

年のわかゝりけるころ国よりかへりきて

京よりのぼりける日吉のやしろにまゐりて侍りける

思ひきや志賀の浦浪たちかへりまたあふみともなのらんとは　平康頼

述懐の歌よみ侍りける時

かくばかりうき世の中を思ひしるこゝろもなくてすぐる身ぞうき　登蓮法師

述懐の歌よみ侍りける時

思ひいりて身はなかれゆくすまひにもなほそらにのこるこゝろなりけり　寂蓮法師

世のつねならぬ事を思ひてよめる

夢のうちはうき世のことの見えぬかなさめてぞうきは思ひしらるゝ　按察使資賢

ひとつ心ありて雲林院のほとりにすみける人のもとへつかはしける

此世にはいかにせよとか思ひけんうき雲のうへをさぞすてつらん　良暹法師

題しらず

うきことの涙もはれぬ袖ならばいづれの方か身をよせて見ん　よみ人しらず

そむきても猶うき事はありけるを思ひしりてやしばしすむらん　山家心

述懐百首の歌中に鹿の歌とてよめる

うき身をばはなれがたくぞおもほゆる世の中よ道こそなけれ思ひ入る山のおくにも鹿ぞなくなる　皇太后宮大夫俊成

百首歌中に述懐の歌とてよめる

おもひしる人こそなけれ身のうさをよそにみてこそ哀れなりけれ　前参議季通朝臣

いかにせんまよふ心のしるべにはさてもこの世のうきぞ悲しき

ありし世を思ひいでてもなぐさまぬ心のうちをたれにかたらん　上西門院兵衛

わすれぬはむかしのことをおもひいづる世にふる身こそかなしかりけれ　藤原為忠朝臣

前大僧正覚忠にはじめて入道し侍りけるに

かくれがを思ひたちてぞ住みなれし宿をばそこにすてはてゝける

はかなくて経にける年の数よりもなほこのさきぞとしふりにける

いひおくりける

かへらぬ[illegible]ゆめ[illegible]あらまし　前右京権大夫[illegible]

返し

うき世をは捨て入りぬと思ふとも[illegible]　前大僧正覚忠

閑夜水声といへる心をよみ侍ける

岩そゝく水よりほかにおとせねは心ひとつをすましてそきく　仁和寺法親王守覚

高野にまいりて侍けるに奥院の静蓮法師か庵室に

まかりあひて[illegible]

[illegible]　権大納言実国

秋の比[illegible]山に籠りて[illegible]の[illegible]

に西法房か[illegible]

[illegible]　藤原[illegible]

題しらす

おもひやる[illegible]うき世の[illegible]　法印[illegible]

[illegible]世を[illegible]　寂蓮法師

[illegible]思ひは[illegible]の[illegible]　殷富門院大輔

[illegible]　西住法師

[illegible]

[illegible]　[illegible]

題しらす

大井川[illegible]　空仁法師

[illegible]

人のもとへ[illegible]

[illegible]　大江公景

題しらす

[illegible]　法眼兼覚

賀茂社の[illegible]

世の中の[illegible]　寂蓮法師

山寺に[illegible]

[illegible]

世をそむく[illegible]　[illegible]

源清雅九月はかりにさるへく山寺に侍りけるを人のとひて
侍りける返事にせのしき侍けれはよみてつかはしける
思ひやれなにを山の草深の袖に露をく秋のさひしさ　源通清
題しらす
暁のあらしにたくふ鐘の音をこゝろのそこにこたへてそきく　円位法師
いかにせむ身をうき物と思ひしれはひとりすみける廿八
述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる
世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿そなくなる　皇太后宮大夫俊成
秋比山寺にまかりて侍りける
思ひしるかくも秋寒の音は野山ふかくもたつねせよとや　藤原良清
題しらすして
これも又たゝに方とさすともきて露もかせしのかりせ八　藤原公衡朝臣
太宰大貳重家入道し侍りて後山寺に住侍りけるにつかはしける
新しく山に入にし道とても同しうき世のほかならぬかは　藤原有家朝臣
重家入道にかはりて返しの又の年よの奥にかくれて
の花ちりしとみてし山にいまもえたゝへにけるかな　廿八

せさしよく侍ける
数ならて苔の下にはくちぬともやすらはぬ身のこゝろかは　権中納言通親
かしらおろして侍りける時権中納言雅頼まさに男に侍りける時
ころしめて果殿上させ侍りけるをゆるされて侍りけるに八年経て
そうせさせ給ひける
嬉しさを逢ふとまつ山人の苔の袂にせよくもなるかな　入道中納言雅頼
還昇し侍りける人のもとにつかはしける
うれしさはよその袂もつゝみけりもとの雲ゐにかへる夜の衣　藤原季経朝臣
今上の御時五節のころ侍従宗家あやまりあるさまにて殿上のそかれ侍りけるその年も暮にける又の
年の源宗家の院のつらに法皇よりかへしゐさせ給ふへきよし
たかき宮にまうけり侍りけるをきゝてつかはしける
三代の御代の宮仕へにし年も暮たちかへり川へき
このよしを奏し侍られていかにかなしかるらむせぬまし
くもゐにかへるや昇殿還昇侍るとて侍るへきよしのみもしきかかへて
ひたるよりのちにし侍るとつくしと侍られけれは返しよみてよめる　入道皇太后宮大夫俊成

題しらす

わたつうみは雲居となりけり海士の海と見わたすやまるん　前大僧正覚忠

そのなはあされはいつくの所かすまるゝすとも

とさのくにゝ侍ける

千載和歌集巻第十八

雑歌下

短歌　雑躰

堀川院の御時百首の歌たてまつりける時述懐歌とてよみ侍りける　源俊頼朝臣

もゝしきの　瀬ゝにおもひて　ことへなり　思ふことは

おほうちまて　ゆくすゑしらて　せられけり　夜のまにて

なからかへ　かれ行けの　つまるをと　思ひ出ておもひ

なけにまへた　いてみえて　うきとおもふ　かさね深の

ひろまゝて　ひとへにかれ　なけはれて　深のほとの

おほけなく　にしきみえ　みのかたく　いふまるれ

なのまされ　喜きのうすけ　うき給て　なきかの袖に

こらむてぬ　物のかれに　おもひても　思えん人に

おほうかう　かさの深の　こちなさく　いふさかれ

きりのうち　いままきて　ちきれん　ことのまされ

かへ風の　くやしきなく　たまかう　とれ飛ひて

おりゆへき
せりつらし
ありそれなね
かよへとも
おりまど終え
いろせさん
ちらぬ雨と
なきさへく
わてしわく
つまりなく
ありなきら
さふめ色し
らくすてな
おもかし
家のまど八
ありちえん

あれさの袖よ
ゆけどまれ
花よさくみれ
うかくのすし
ちまちこ花の
よその山へよ
河かりみれ
様の世とれ
ゆへさるて
縁に乃の寿を
海縁思ハ
あへ人ひより
萬に爰ろ
家みかもし
気もとゆく
袒とハろと

家もひとさ
さしうく
ちらめなり
ひさささの
さにあう
わくまてく
ゆさころて
さおりへよも
海てや見ぬ
かなま世八
いたれまの
みくへく
らくらく
名もよまの
まちさく
ちりてられ

見るさくまよ
錦のよ
雲気人ゆき
月にゆりし
ひとはなみれ
このもうのれ
花の様り
思うく
うつ浮きの
いろれすに
先つゆふて
こふれうり
ひきつ納よ
聖なかの来の
りよのちつと
業ふさうて

きつむへき
徒のえの
らせうつ
ん後の
まつしみ
きつめく
とのりら
雲をるの
みるくり
川の國の
くり返し

かくのよ書れ
涼まてらふ
そふかちぬ
浦の風ふ
浦庭の松の
お君をみれ
恵されぬへき
おやゆれのなさ
梢も見て
世恵の松の
色まなく

わきひく
らせらひ
世井に
こさめり
つまてし
ゆくまの
帆それて
宿られて
これまち
いさひら
かなうせん

うちと枝星に
うつかも
みあやめを
うねよ浮から
いうつちを
命のあゆへ
そちう行すも
是よさそて八
そねさけて
お渡れて絶

夫木集　西行
世間からはわかれつる家るれやしはら捨まてとまるれはそりまそり
百首あてしかるはりよそせものけり
宗祇法師詠

きさつきや
ひさささの
中の家れ
三の浪がにて
ちまりて
浪うつりを
ゑけれてろれ
今りおまり

ひとりねハ濱の家の八雲よりかゝりし月そ
たのめぬるきれぬる波ハ西草の乃こゝのそしけく
ちらくよ風ふけてこゝをまつとちらぬみよ
かり川のみなれを越てさらぬこのよりくるよ
あはらぬつらなきすハこゝ夜より結とまつて
とめしとたゝみまても浦の雲乃我浦の浦れ
うちすてあさきれよこの山をあはの山
身をゆくよるへきハとうしのかとやせれ
おりへしもかゝおもてまつら錦る

おなし百首まけつ時のころ　侍賢門院堀川

たちたあ春れ山までたちそてむしの音を
とひいされ何れあやあしときすのいなかぬ月の
新しくも河竹よ身を袖の浦よ春の風吹る
おかしくておもひをけくさつへて浦よりより
はつ身のころされすし世にれぬも宮のころを
きくしより春けきれてこすれいさ夏をかえ

何の江の松のちとせのもろくと構くなるよ
さゆへきさ宮のかけをこの山まてうかさの濱の
あさきて如れ社のそのうこれ夕ぞうらて
思ひれ雲井の木さしのこゝ年して春の月夜よ
さつまさと風ハ荒れよあさをして雲をまてよ
おもへて只今つかうあらされあさ江の
くれかすあれ何のをととうしのうれしみや
あくれなれ

讃岐

志のきつさのつとれかけりもせると何くそのかりさりきる法　源仲正
みをよのうしとれおそんよつうしけり
東路の八重の霞をわけきても君かあたりハすまかそて　源俊頼朝臣
うたちこそすまと
わさ路しまたつはらしゆきみれハてそあつりのことれくもてつらく

百首歌よりまける時ひのゐとよめる

あつまちの此関路のさゝ原風よそにこそきけゆめのしかゝり
うきめのこかり付ぬ　左京大夫顕輔

折句歌

二条院の御時ことしさくらといふ事を句のかみにすゑて旅の心を
弱る日へといさゝ尾ゆきし菖蒲川さて波よりも宿やかりなむ　源雅定朝臣
そのしかみさのおきをよりてくれときてさびの心をとよめる
何となく旅そ出つる枯尾の野辺に露のおきてし夜をしのぶ覧　仁上法師

物名

さみだれをとよめる
よのなかはかりのやどりの世の中をいつかはつゆの命なりけり　和泉式部
すゞむしを
夕暮ともなく入日さしつゝそれとみえつるの青さおもひかけ　中納言定頼
かきつばた
柳葉のはなをあらはにせきかねつ我よみくらぬけれ　大貳三位
うりいくを
池水のうきことさきて氷うすく山の月影みえそめし乙　二条太皇太后宮大弐

かるかや
我ためと思はばかるかやましなの里の風さぞ人をまよはせ　源俊頼朝臣
まさつのかさて
見てしのぶまさつのかさて宿見ん人とつきに待たそ思
かりかねのこえ
よしやこの夜をいかにみるらむ引つれてかりかねのこえやしら
さりさくれ
秋の日に影をとめてきん行人の秋もみえぬとかへりて人まち道　刑部卿頼輔母
百首歌の中にかりを詠める
きりぎりす
秋はさりくらき夜の思ひ出る事とて月をみまほしき深山辺の里　待賢門院堀川
みつのかみ
いかなる山のいつくのまかりてみつのこゝろもかたにのせてさわれり　源仲有幸
かさたのいくや

誹諧歌

みなかくて常はゆくのの君のさいて後はかなきゆふくれ　登蓮法師

花のちりにけるころよみ侍りける

おしなへて花のあたりはなかめせるもろ人の山のかひやなかきそて　道命法師

卯花をよめる

卯花のさきてしらしらとたえまなくさそふ風にはそらにしろし　源俊頼朝臣

五月五日菖蒲をよめる

けふかゝる袂にねさせあやめ草うきは我身にかゝりてしらすや　西因法師

こゝろをよめる

こりすまに郭公の山よりはさりともとたのむかたにまちわひぬ　橘俊綱朝臣

みな月晦日にみそきをしてよめる

夏はつるみそきのせにかなかれてはけふのゆふへにかはりゆくらん　侍従

秋歌上

秋くれは秋のきたるを見しかとも時あつめぬ月にかはりぬる　輔仁親王

萩の露をよめる

みやきのの萩のしらつゆおきそめてたのむ心を人にしられは

初秋のこゝろをよめる

くさのはにあきのしるしのふくかせはけふよりちかき秋の夜やまた　前中納言基長

わかせこの萩の葉そよく風なれは　近衛司

つゆしけきのへの萩はら秋くれはしかのねたてゝよするなり　前左衛門督

萩花をみて道のへに侍りける心をよめる

あふさかの関のしみつに影見えて今やひくらむもち月のこま　修理大夫顕季

九月十三夜月をよめる

さやかなる秋のよなかの月影はいつもかはらぬ心なりけり　前参議教長

播磨国にて月をよめる

きよみかた秋の夜ふけて見わたせはなみにやとれる月のさやけさ　覚雅法師

堀川院の御時百首の歌たてまつりけるとき

あさちふの露のやとりの月影はいつより秋のかたみなるらん　藤原基俊

旅の心を

たひねするあしのまろやの秋風はたちゐにつけてものそかなしき　源俊頼朝臣

百首歌たてまつりける時よめる

すまのうらのもしほのけふりたちのほりいつまてかくてすみわたるへき　侍賢門院堀河

六波羅蜜寺の講の導師にてまかりけるに女房のもとにつかはしける

人の見ぬ夜をかさねてもみのうさをわすれぬ人のまつそかなしき　良暹法師

山さとにこもりて侍りける時あるしにつかはしける

きれしよふして行つりきつ
わたつみやきのふもけふも久しき風の音もさはしき空人法師
賀茂祐よこりりて帰けるに曉のあくるまでに　詠よめる
篠原やしくれもてひとりかゝるもの[illegible]のひとりさし
ありそてなきすみくもきかりみゆるしまのうらのなかくにはなれそく
まつふくこゑりきれハつりまつ
船行のこゝろして行よ曲りうむ[illegible]ちかへせてそこまはり　寂蓮法師
わけまゐるこゝろありきみにハなしかくよめる
八ちよの後よろづよをおもふゆふなる山べにあひみてし月へにもとへ　道因法師
女のうへひ給けるをいかにしてまつるすゝろなりきありけん
行くひひ給けまに八ふかめる
わたしてもれかゝ秋山鳥うくらいりにかゝる世やりとし　寂蓮法師　佐藤時光
いかなれ小町の文字と今のうへにうへてすりこゝと頃なる
れとかくにつき給けり
わかれちやけり文字の海とのりゆけれハ行く園のとわすれや　法性寺入道前太政大臣
此寺にはまゐりまゐりける　別当僧都とよすてよめる
いかなきく年の月日をて咲つるも末のなかさかつ付るへん　奉法太政
詠よめりけり
秋来ぬとめにはさやかに見えねともかせの音にそおとろかれぬる　寂蓮上人
拾遺ニ　恵慶法師　蘇上在

千載和歌集巻第十九

釋教哥

維摩經十喩の此身水泡のことしといへる心をよみ侍ける

こゝに消かしこに結ふ水の泡の浮世にめくる身にこそ有けれ　前大納言公任

浮雲のことしといへる心を

定なき身は浮雲によそへつゝはてはそれにそなりはてぬへき

三身如来と知すりとよませ給ける

世中はみな仏なりとおしなへていつれの物とわくそはかなき　花山院御製

法花經藥草喩品の心をよみ侍ける

大空の雨はわきてもそゝかねとうるふ草木は己かしなしな　僧都源信

菩提といふ寺に結縁の講しける時聴聞にまうてたりけるに人のもとよりとくかへりねといひおこせて侍りけれはつかはしける

もとめてもかゝる蓮の露をおきて憂世に又はかへる物かは　清少納言

後冷泉院の時后の宮にて一品經供養せさせ給ける時壽量品の心をよめる

月影の常にすむなる山のはをへたつる雲のなからましかは　前中納言匡房

寄月念極樂といへる心を讀侍ける

入月を見るとや人の思ふらん心をかけて西にむかへは　堀川入道左大臣

天王寺にまゐりて舎利をおかみ奉りてよみ侍ける

薪つき煙もすみて去にしあとやのこれる物はこれにそ有ける　瞻西上人

法の道よおほさぬ人もあらしそよりて結ひし縁の心を

のちはさうけなき?侍ける

序品の曉とよめるの心をよりて世にのこりし　前大納言隆季

かへてまつそ待て後の世の戀しからまし

三千三界の紀念と見るとて西より来りける

世をこそ照して仏の志かしこけれ

あなとの紀念をとふすりて

見る人を消ての跡をたのむ人に思ふてか

提婆品の心をよめる

年へて法のためにと[illegible]

陀羅尼品の受持法華名者福不可量何況擁護具足受持と云ふ事を誦して持経者の結縁のためによみける

新しき[illegible]

阿弥陀仏の十二光仏の心を[illegible]

他人の心のうちをよそに[illegible]

百首歌中に弘誓深如海の心をよみ侍りける

[illegible]の海にさして[illegible]

百首の中に花厳経の心をよめる

[illegible]

即身成仏の心を

照月の心の水にすむときは[illegible]

法花経信解品の心を読侍りける

わけて入る[illegible]

[illegible]の法は入りは[illegible]

深き[illegible]の[illegible]三世[illegible]

以五十年

[illegible]三世の仏[illegible]

百首歌中に法文の歌中に常楽我浄の心

名利捨離と云ふ心を

憂しと[illegible]月の[illegible]

百首歌よみ侍りける時法文の歌に[illegible]

平等寺[illegible]

[illegible]

維摩経十喩此身如水中月といへる心をよめる

[illegible]

法最乃山[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆきとまれハ宮にかへりて円位法師の許につかハしける　法印(?)

いにしへの鷲のみ山やかはるらんけさの白雪

きえし(?)

春のはしめ(?)ん法…にて八講…よみ侍りける　…法師

法花経方便品(?)の心をよみ侍りける

花のこゝろあしこ(?)海にうかふや(?)たゝ人八(?)…　左近中将…

…殿…にて…世にかけ(?)…の…

…の心をよめる

…の心をよめる　…

…の前(?)色即是空空即是色の心をよめる

…やこゝろ…　…

法花経…寺…の心をよめる

…　…

…の心をよめる

…　円位法師

…上人…の…に…　…

いさゝかの池…影…と　神祇伯顕仲

大品経乃常啼菩薩の心をよめる

…ける…すハ　寂然法師

維摩経十喩此身八芭蕉の如しといふ心をよめる

…今ハ…とおもひし　藤原資隆朝臣

…世をハ…

…の心を…

…の…の月　寂蓮法師

頻婆…の心をよめる

…氷も…　待賢門院堀河

観音…の心をよめる

…枝も…　前大納言時忠

法花経序品の心をよめる

…　藤原俊経

提婆品の心をよめる

…右京大夫季能

法師品漸見湿土泥決定知近水の心をよみ侍りける
ひさしくのかわける土もぬれそめてちかき水をもしられぬるかな　皇太后宮大夫俊成
提婆品をよめる
若のとしむかへいりし薪のこりやゆくせをまつ今日の坂　静縁法師
勧持品をよめる
我のかくたやすくなしとく此極目の旅も今後すと　法橋素覚
憂とまつるきやうにのみ深んとそ待山と照き月影　前参議教仲
弥力品如日月光明能除諸幽冥の心をよめる
日の光月の影とそ照しきつる此心の闇やれなさそ　蓮上法師
勧発品の心をよめる
若後文殊を念しくも此山法の山しるすき書きの下之　皇太后宮大夫俊成
満三七日已乗六牙白象の心をよめる
後出しくも此誓ふへんを待ち亦海の此山のそ此月　中宮有安
聞羽法の法といふ心を
的まる此法の庭は深きはかしらり花の数とそ見る　中宮清定
山階寺の涅槃会の蓋かるに遅延の嘆の昔をといひ讃めて
釈迦の雲かくれ生死は人の為をこそ山の雨にはむら　恵章法師
涅槃経の如於夢中見諸色像の心をよめる
誰くらひ心の庭をかくしにくきやそて持つ色も姿と　後寿法師
一識久不能言ゆの心をよめる
煙くに生えてしまひけるへ山こえ柄かし根みんとすらん　寂然法師
阿弥陀経の心をよめる
今山の夜も長の苦みそ遅れたり法を定そりかり　平康頼
天王寺の御堂の時右寺のなといひける心をよめる
世をとらへ深へ昔にかかつ都くそらめされば山の時をそてさ
天王寺にまいりて遣身舎利を礼してよめる　前参議雅経
常なきのなかめしは我身の煙ふく消ぬなかをとうえ嬉さ　天台座主明雲
没生諸式かきつけり時教化の言よと侍ひける
みえ人へと深きもしく思ふ心をそ捨ふんゆく志すへきかれ　律師永觀

千載和歌集巻第二十

神祇哥

後一条院の御時はじめて春日社に行幸ありけるに一条院の
御時の例とおぼしめしていまさきも(?)まゐらせ給ひける
三笠山さしてきにけり石の上ふるき御幸の跡をたづねて　上東門院
長元八年関白左大臣家哥合し侍りけるに
に住吉に詣てよみ侍りける人々のあまたよみ侍りける
住よしの浪も心をよせければ昔へかへる汀に立よりける　大納言経輔
白河法皇熊野へ参りの道にて侍りける山伏のもとに志るしをやりてよめる
思ふことくみてかなふる神なれば八幡やは頼をかくるなりけり　後三条内大臣
百首哥めしける時神祇哥とてよませ給うける
道のべのちかひを思へば神もなほわすれけるものの世なり　崇徳院御製
天てらす光こそそへて(?)や御笠の山にさしのぼるらめ　藤原清輔朝臣
中納言家成卿住吉にまうでて哥よみ侍りける時よめる

神代より流れの浦にあとたれてたえなん年の限こそなく　大納言隆季

大納言辞し申して出仕もし侍らざりける時住吉の社の歌合とて人々

よみ侍りけるに述懐の心をよみ侍りける

なにか道八かへりの浦になみ立てて浪の上にかゝりけるかな　右大臣

そのゝち神感ありけるにや思ふ程に大納言にかへりて還任し侍りける

おなじ歌合り

住よしの松の梢の浪のおとを沖の白浪かけて聞くらん　皇太后宮大夫俊成

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける

かはらぬを松のいはねにやどしてもひかりもさやに住の江の月　右大臣

住吉の松のゆきあひの浦よりや舟出し侍りて道八重の浪ぞまさりけり　僧都範法師

住吉の社の歌合とてよみ侍りける時社頭寄花といへる心を

よみ侍りける

ともすればはれぬる月の影ふかき住の江の神のなさけなるらん　権大納言実国

東宮の陽明門のはやく出陽明の神をいのり侍りけるに陽明の神とは

三輪の明神もなしとかきそへて侍りける

神つくるゆふしでかけて三輪の神のいつまでか我まちくらしなさむ　藤原資賢

熊野にまゐりて侍りける時岩代の王子にてよみ侍りける

岩代の神はしるらんしるべせよたのむうき世の夢の行末　権中納言経房

三輪の社にまうでてよみ侍りける

杉の葉にしめゆふ風のすゞしさは三輪の神の心なりけり　僧都範玄

石清水にまうでたりける時三輪の神のしるしに

今ぞしる神のゆふしで長月の秋の末葉に色かはりける　平忠盛

かゝる時なにしか社にまうでて侍りけるよし申したまひける

八幡の神のしるしはあらじとぞ思ひけるを思ひいでて

汝をぞいまはたのみける

言の葉にかけぬ日ぞなき石清水神のしるしを人にみせばや　賀茂政平

その頃なにの社頭によみける

西宮にて神祇の心をよみ侍りける

行く末の神のしるしのなかりせばたのむ甲斐なき世にもあるかな　神祇伯顕広王

賀茂社の歌合とてよみ侍りける時述懐の心をよめる

君を祈る心を神も知るらめや思ひかけぬる社なりけり　賀茂重保

かれし社の後番前会の時月の前といへる心をよめる

みもすそ川ちるせの岩波にあらそふ秋のよの月　皇太后宮大夫俊成

述懐の心をよみ侍りける

神路山日吉なりける奥山のしるしなりともさてやあやなし　法印慈円

日吉の社に大宮の御前を思ひてよみ侍りける

頼もしな光を神にあふく身のしるしもみえむ志賀の辛崎　法橋性憲

日吉の社にまうて侍りける時あまたの歌よみける時によみて侍りける

おきそひしよみ侍りける

八百万神の前には雲晴てそらに日吉の光しるしも　中院僧正

高野の山を住うかれて後伊勢国二見の浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をは神路山と申す大日如来の垂迹をおもひてよみ侍りける

深く入て神路の奥をたつぬれハ又うへもなき峰の松風　円位法師

治承四年遷都の時伊勢太神宮にまゐりてよみ侍りける

念しかりて詠侍りける

月よみの神してらさハあた雲のかゝるうき世もはれさらめやハ　大中臣為定

みかくらの声もとよむ

石清水社にて人々よみ侍りける時社頭月といへる心を

いはし水清き流れのたえせねハやとる月さへくまなかりけり　寂蓮法師

長元九年後朱雀院の御時大嘗会主基方の神あそひの

歌丹波国神なひ山をよめる

万代を神なひ山の榊葉ハとしことにこそ色もかはらね　藤原資業

治暦四年後三条院の御時大嘗会主基方の神あそひの

いつくしや山をよめる

さかき葉も千代にてそ神のいつくしや山さえ榊葉の色もかはらし　藤原家経朝臣

寛治元年堀河院の御時大嘗会悠紀方神あそひの

郷をよめる

千代への神代よりあまりけるいつしかハ君か代のため　前中納言匡房

久寿二年　院の御時大嘗会悠紀方風俗近江国

本はの国をよめる

神代より風ふきつたふ白銀のそこそもへ照りまさり　宮内卿永範

嘉応元年高倉院御時大嘗会悠紀方神あそひの哥

近江国守山をよめる

ゆつきさとやまと萬代の秋もみな君か齢にあかる山の名そこれ

嘉永元年大嘗会主基方風俗哥よみてたてまつりける時

丹波国神なひ山をよめる

君まつるゆふかけけるひの山かつらかさしけるかな [illegible]

元暦元年今上御時大嘗会悠紀方哥たてまつりける時よめる　権中納言兼光

の斎近江国[illegible]郷をよめる

[illegible]の代の今そかしこし君を八千代と祝ふ[illegible]

おなしく大嘗会の主基方斎よりたてまつれる丹波国の斎　藤原[illegible]

国[illegible]山をよめる

ちよもへむ山のはに[illegible]の[illegible]さるかなといのる

巻巴第十四

在[illegible]のことなき[illegible]上　[illegible]清輔朝臣

君かよにつかへまつれる[illegible]のはなかりける[illegible]と

右の斎[illegible]御[illegible]